

ここでは、広島県女の校風とその形成過程を明らかにするため、1. 校風はいかにして成立するのか、2. 齋藤鹿三郎校長の資性と教育方針、3. 「座談会 学苑懐古」四、校風と関係資料など、4. 広島県女の校風、5. まとめ、6. 参考・引用資料の順で掲載します。

四、校風

1. 校風はいかにして成立するのか

旧制高等学校資料によると、校風とは学校の気風であり、風の文字の本来の意味は教えである。校風は学校の教育方針を生徒が受け入れ消化し具体化する状態であり、相当の期間にわたり学校並びに生徒集団が積極的に努力することにより醸成されるものである。（『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』1978）

低年齢で人として未完成である生徒を擁する小学校では校風の成立に教育方針を語る教師は、質性として熱誠の人、実践躬行・示範する人であることと、生徒の教育に関し学校と父兄とがともに和して同行することが求められていた。（『芸備教育 7月号 第442号 皇国教育に於ける校風樹立の理念と実践』昭和13年）

高等女学校では就学年齢は12歳以上、修業年限は4～5年であったので校風成立に関し小学校と同様の要件が学校側に求められていたと考えられる。

2. 齋藤鹿三郎校長の資性と教育方針

広島県女は明治34年（1901年）に開校し、齋藤鹿三郎が明治37年（1904年）から昭和2年（1927年）まで2代目校長職を務めた。

齋藤鹿三郎校長の出身は「二、校舎」で記したところであるが、『日本名家肖像事典第十二巻』平成2年（『明治聖代教育家銘鑑3』明治45年刊の影印復刻）に名前が掲載された著名な教育家であった。本書を繙くと広島県女における齋藤鹿三郎校長の資性と教育は他の高等女学校の亀鑑となったであろうと思われる程であった。

齋藤鹿三郎校長の教育方針を時系列で記載する。

明治37年就任式後に「良妻賢母的教育に何かを加える必要がある」と良妻賢母教育【注1】にとどまらない考えを述べた

生徒に対する初めての訓示では「諸子は一生誠を以て貫け」「誠の人となれ」として、人間にとって大切なことは真の真心（至誠）を尽くすことであると説いた。後に至誠の根本は「無限の親切・無限の辛抱」【注2】にあるとし「自分に厳しく他人に優しく」することを繰り返し述べ、人格を陶冶することを奨励していた。

明治38年（1905年）父兄懇話会では「本校の教育は健全なる女子を教育することにあ

り。即ち夫を助けて益々これを発展せしむることを得る力量、家政を整理する力量、貞節を守り得る所の強固なる思想、舅姑に仕えて感情の衝突を来たさざる事を得る品性を具備する女子を作るためにあること、服装は質素なること、すなわち将来は平常綿服を着用せしむる方針なること等なり。」と健全なる女子を教育し、良妻賢母教育に関係する徳目に十分に対応できる力量を備えうる教育方針を明らかにした。(『皆実有朋百周年記念誌』平成13年)

明治44年(1911年)齋藤鹿三郎校長編纂の『明治女大学』では女子の心得五カ条として、一、夙に起き夜には寝、忠孝を第一と心得べし。二、衣食住は質素儉約を旨とし自ら励まして勤勞すべし。三、勇氣貞操温和従順を以て身を夫に捧ぐべし。四、家政の整理と子女の教育とに力を尽くすべし。五、何事も親切辛抱を旨とすべし。を記していた。(『皆実有朋百周年記念誌』)

齋藤鹿三郎校長は、大正6年(1917年)入学式の式辞の中で下述する校訓十カ条を述べ「親切・辛抱」を校訓としたことを明らかにした。一、君の恩を忘れるべからざること。二、父母の命に従うこと。三、先生を敬いその命に従うこと。四、兄弟仲良くすること。五、身体の健康を図ること。六、十分勉強すること。七、自分を重んじ本校生徒たるの本分を守ること。八、何事も働くべきこと。九、先輩を見習うべきこと。十、親切辛抱なるべきこと。(『皆実有朋百周年記念誌』)

齋藤鹿三郎校長は上述の教育方針の下で、体育、知育、徳育を行い、生徒に実践躬行を奨励していた。

更に齋藤鹿三郎校長は教育に関して「躬行の心得」で行い、何事にも動じない意志をもつ鉄心石腸を現し、生徒を教えるに際し教えて倦まず繰り返し繰り返し講義をし、生徒に教育に対する心構えの範を示していた。

【注1】明治32年(1899年)文部省は、高等女学校は女子に必要な高等普通教育を授けることを目的とした「高等女学校令」を公布した。明治35年(1902年)文部大臣は、高等女学校は独立自活するための教育ではなく、家庭にあって高い教養を身に付けた良妻賢母を養成するという基本理念を明らかにした。繰り返された戦争などにより良妻賢母教育は家族制度維持のために必要とされ、国家主義のもとに位置づけられた。(『皆実有朋百周年記念誌』)

【注2】齋藤鹿三郎校長の教え「至誠」「親切・辛抱」は、齋藤校長が明治25年(1892年)から行っていた吉田松陰の人間学的研究、幾多の勤王の志士を輩出した「松下村塾」の教育学的研究(後に『吉田松陰正史』を上梓)から齎されたと推察する。吉田松陰は孟子を終生の友とし、「至誠にして動かされざる者はいまだこれあらざるなり」(『孟子』離婁編上)を座右の銘としていた。至誠は人格の根源である。吉田松陰は生徒に教えて倦まず無限大の親切で教授し決して叱ることはなかった。理解力が乏しい生徒に物を教える時には自分が習うつもりで教えていた。そこには母親から学んだ

「無限大の辛抱」が表裏一体であったと推測するに難くない。教えは文字や文章を記憶暗唱する記誦詞章ではなく、教えを生徒自ら行う実践躬行の実学であった。吉田松陰は一度決めたことは遣り通す鉄心石腸、先見の明のある人であった。これらの松下村塾の教育は後世の教育者に範となったであろうと推察する。また吉田松陰が多くの人に対して「親切」であったことは、他の研究者も取り上げているところである。(下程勇吉著『吉田松陰の人間学的研究』昭和63年)

「親切・辛抱」の由来について『皆実有朋百周年記念誌』には次のように記載されていた。

「〔…本校の伝統精神は「しんせつ」「しんぼう」であるといわれ、また当時の生徒は口癖の様にしてこの精神で教育された…略…。〕これは、本校教職員であった吉村忠幸が『まことの徳』42号で述べたものであるが、この「親切・辛抱」という言葉の由来は何であろうか。ある日、吉村教諭は、当直室の壁面にその由来が書かれているのを目にする。〔しんせつ しんぼう 八十二 よしこ の文字を三行に書し、その後書きとして『大正二年五月廿五日吉田松陰先生令妹児玉芳子夫人来広せられ、本校生徒及び卒業生の為に上文の文字を揮毫せらる。本校訓育の主旨は実にこの二語につく、謹んで由来を書す。大正二年六月一三日齋藤鹿三郎』とあったのである。…略…。〕
〔『まことの徳』42号) 実は、この「親切・辛抱」という言葉は、吉田松陰の妹、児玉芳子の残した戒めの言葉からとられたのであった。〕

「親切・辛抱」の言葉教えは、明治44年齋藤鹿三郎校長が編纂した『明治女大学』に女子の心得として記載されていた。齋藤鹿三郎校長は、明治25年以来、吉田松陰研究の為、松陰の妹児玉芳子をはじめ多くの松陰関係者に接し調査しており(『吉田松陰正史』)、そこで女子教育に「親切・辛抱」が重要であることを見出していたのであろうと推察する。

3. 「座談会 学苑懐古」四、校風 と関係資料など

座談会の内容から文章を(ア)～(エ)に分け新仮名遣いで記しそれぞれについて資料をまじえて齋藤鹿三郎校長の教育方針、生徒の学校生活を記述する。

筑瀬 (ア)

「その時代が校則の最も厳しい頃でした。〔あれ位のことが〕という位。以後はデモクラシーの時代に入った。〔西の学習院〕【注3】といわれ長袖の着物に海老茶の袴をはいた良家の子女が勉強したものだ。」

—資料など—

明治 34 年誕生した広島県女の初代校長時代は、厳しい校則と家庭での心得が定められていた。しかし生徒の服装に規制はなく（写真 1）、[西の学習院] のスタイル【注 3】で、昼休みに先生たちとダンスを楽しむなど学校生活を謳歌していた。当時の状況を有朋 1 期生は次のように記している。

「生徒達は二尺に近い長袖をひるがえし、ハイヒールや、重ね草履の厚いのをはいて、品の良い御児髷に白のたけながも清く、中広のリボンを御下げや束髪にかざし何の苦勞もしなく嬉々として暮らしていました。[広島華族女学校]【注 3】と迄言われた程でした。」（『皆実有朋六十年記念誌』昭和 36 年）



写真 1. 創立当初はおさげや束髪に幅広のリボンをつけ、長袖に袴、靴が正装。

やがてリボンは中止された。出典：『皆実有朋九十年史』1991 年

【注 3】明治時代の女学生のファッションは明治 20 年（1887 年）華族女学校に誕生した。振袖の和服で海老茶の長袴を着用し靴はブーツ、おさげ髪にカラーのリボンを付けたスタイル（『風俗画報』第 189 号明治 32 年 華族女学校玄関前の図）は全国の高等女学校に広まった。袴は体育などで活動しやすいものであった。華族女学校は、明治 39 年学習院と合併し学習院女学校となった。（『開学前史 1877～1948』 学習院女子大 https://www.gwc.gakushuin.ac.jp/history/history_01、『学習院百年史第一編』昭和 56 年）

広島では、広島県女は華族女学校にあやかって明治 34 年から 39 年（1906 年）頃 [広島華族女学校]、40 年（1907 年）以降 [西の学習院] と呼ばれていたようである。

《イ》

「それが質素にしなくてはと袖口 5 寸に袖丈 8 寸の筒袖の着物、膝すれすれの短い袴に黒い長靴下、黒靴という服装に変わった。髪は 1, 2 年生はおさげ髪、3, 4 年生は前髪をあげた。二百三高地の束髪でさざえのつぼやきの格好だった。」(写真 2～5)

【注 4】

—資料など—

明治 37 年 2 代目校長に齋藤鹿三郎が着任して、校則はより厳しいものになった。

齋藤鹿三郎校長は良妻賢母教育の徳目として「質素儉約」を説き、衛生節約を旨として、衣服は木綿の筒袖、履物は靴を奨励、髪型は学年によりおさげ髪、束髪などとし華美なものを止めさせ、さらに劇場、映画館、飲食店への入場を一切禁止させた。(『皆実有朋八十周年記念誌』昭和 57 年、『皆実有朋百周年記念誌』)

靴下、靴が黒色であったことは、体育などでの運動のため袴を短くし、露出する下腿を覆う目的で黒色の靴下としそれと合わせて黒色の靴を使用したのであろう。

生徒に実践躬行の教育法で質素儉約の精神を身に付けさせたと考える。

新しい校則に関して前述の有朋 1 期生は次のように記載している。

「楽しく学び楽しく遊んでおりましたところ 3 年の春、新学期となり突然齋藤先生が東京御茶の水女高師から新校長として赴任されました。齋藤校長となり、全く一変されてきました。着々と堅実な校風が作られてきました。親切辛抱をモットーになにものにもめげぬ梅花の気品が植え付けられてきました。今日の大成はこの校風のたまものと思います。」(『皆実有朋六十周年記念誌』)

有朋 7 期生は齋藤鹿三郎校長の鉄心石腸のゆるぎない教育方針を次のように振り返っていた。

「私どもが明治 41 年 (1908 年) に入学した頃には、2 代校長齋藤鹿三郎先生の時代で、先生の質実剛健の教育方針によって、木綿の筒袖に袴、それに靴をはいて通学していました。当時の世相から考えると、ずいぶん進歩的な考えで、ああした教育では女らしさがなくなると言って、父兄からも、新聞からも非難攻撃があつて、それを理解してもらえらるまでには、大変な御苦勞があつたようです。」(『皆実有朋六十周年記念誌』)



写真2. 木綿の筒袖、束髪 廂髪
黒色ソックスと靴 明治39年
出典：『皆実有朋九十年史』



写真3. 二百三高地の髪型 明治40年
出典：『皆実有朋九十年史』



写真4. おさげ 束髪 廂髪の髪型 木綿の筒袖
大正3年 出典：『皆実有朋九十年史』



写真5. 短袴、黒色靴下と靴
大正9年頃
出典：『皆実有朋九十年史』

【注4】女性の髪形は、鹿鳴館時代以降日本髪が不潔不経済であることから束髪に変化し、前髪と鬢にすき髪をいれ膨らませる廂髪、後頭部の髪は束髪、さげ髪で大きなリボン飾るのが女学生である。前髪の廂を出し鬢を高くすると二百三高地鬢の髪型である。（『日本髪大全』2016年、『日本の髪型』昭和56年）

（ウ）

「県女の生徒にマークはいらぬといわれる程特色があった。色の黒いこと、肢の太いこと、風をきって颯爽と歩いた。運動が盛んで弁当箱の小さいものは許されなかった。だ

から大飯を食うのが特色だった。冬の手袋、肩掛、夏の日傘は用いさせなかった。」

—資料など—

体育に関しては、広島県女の教育方針「健全なる女子を教育する」、「一国の基礎が一家にあり、一家の消長が主婦の健康にある」そして齋藤鹿三郎校長の持論「健康なる身体には健全なる精神が宿るものである」（齋藤鹿三郎校長の著書『女子補習子女教育法』明治39年）から身体の発育、健康を重要視し、健康診断、十分なる栄養指導をおこない、運動（各種運動、遠足、郊外への行進など）を奨励した。その結果生徒の体格は全国平均に比べて良く、健康状態は向上していた。詳細は「五、学校生活について」「六、運動」の項で示す。

体育は「才子多病」の罹患予防になって居たと思われる。

屋外での運動を積極的に行い、防寒や遮光をさせなかったのは『女子補習子女教育法』にある「小供の身体を冷水に慣らせ手と足は常に空気中にさらして置くから顔と同じく寒暑に耐えやすい。」「小供をば成るべく大気中に出し置け。寒暑晴雨に耐ゆる習慣を養うことが大切である。できるだけ日光の中にて遊ばすのが良い。」の方針を広島県女の生徒が健康なる身体を育成するため施行したと推測する。

座談会では語られていない知育に関しては、十分勉強し子女の教育に力を尽くすことが良妻賢母教育の徳目にあり、「五、学校生活について」で記載しているとおり厳しい教科指導がなされていた。学力体力は日本一と称していた。



(五其) 合動運回八第校學女島廣立縣

写真6. 明治39年第8回運動会 当時棍棒体操は高師のみが行っていた。

出典：『皆実有朋九十年史』



写真7. 排球 昭和初期 広島県女ではバレーボールは大正14年(1925年)に取り入れられた。(『皆実有朋六十周年記念誌』) 出典：『皆実有朋九十年史』



写真8. 昭和初期の理科（化学）の授業。
生徒は非常に熱心の実験を行っている。出典：『皆実有朋百周年記念誌』



写真9. 裁縫の授業 時数は最も多く取られていた。昭和初期
出典：『皆実有朋九十年史』

《エ》

「何もかも木綿づくめ、銘仙は卒業式の送別会のはじめて着た。5期か6期からの伊勢参宮のときには流石に短袴を恥かしがって長袴を許して貰った。齋藤校長の良妻賢母主義からあの旅行は卒業の御礼参りと将来の誓いを目的にしたものだった。ですから出発に当って校長から厳格な訓示があったものです。別に修学旅行というものはない。」

—資料など—

齋藤鹿三郎校長は、広島県女在職24年間のうち1回を除き毎年正月元日に全校生徒に「君、父母、師」の3恩を説いており、毎年3月の卒業式が終わると、伊勢神宮に直行し皇祖の霊を拝み「忠臣となれ・良き子を作れ・行を正しくせよ」と訓示を祈っていた。（『皆実有朋六十周年記念誌』）

座談会で語られている生徒の伊勢参宮は齋藤鹿三郎校長からすると単なる修学旅行ではなく徳育（国家道徳）の一環としての皇祖への御礼参りであるとして、華やかな装いをせず通学時と同様の短袴の着用を指示したものである。出発に先立った訓示も校長自身が伊勢参宮での報告と祈る言葉と同じ内容であったと想像する。



写真 10. 伊勢神宮参り 大正 7 年 (1918 年)

出典：『皆実有朋九十年史』

次に学苑懐古の座談会では語られていない儒教の教え「長幼の序」について記載する。礼儀についても服装や髪型の指導と同様に厳しく実践躬行であった。当時を有朋 5 期生は次のように懐古している。

「毎朝登校の折の門前で下級生が門を入りかけた時、先生は勿論上級生がみえますと十間位も待って門の両側に並び次々と上級生の方が見えると十数人もまるで貴婦人を御迎えする様です。上級生は悠々として一寸会釈をして門を入り低学年生は其の時から入る事は勿論です。又運動場などで整列しているときでも向こうの方で 4 年生が見えると一寸気をひきしめる気持ちでした。」(『皆実有朋百周年記念誌』)

こうして、長幼の序が強調され、以後、上級生を中心とした整然とした校風が出来上がっていった。

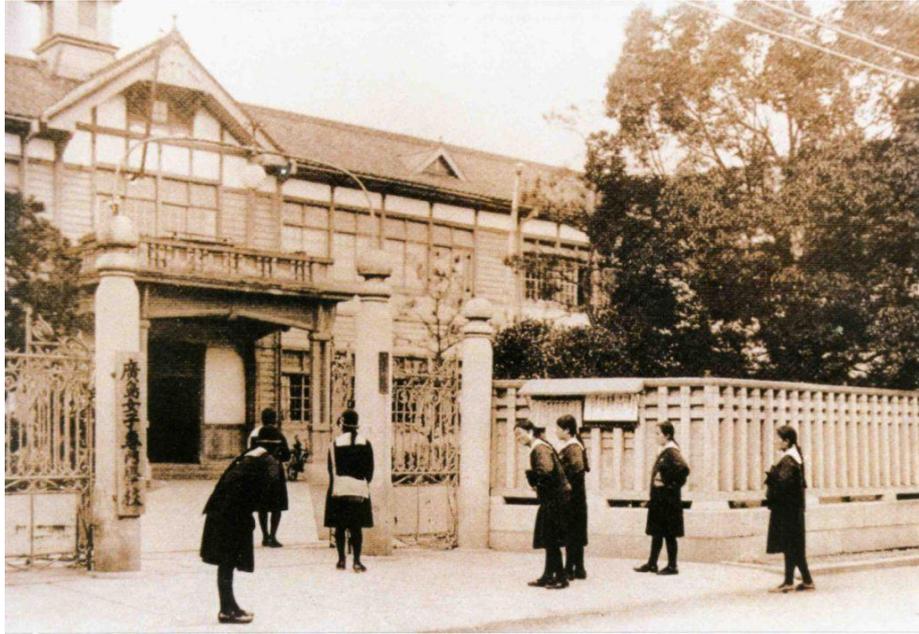


写真 11. 校門での挨拶 昭和初期
出典：『皆実有朋九十年史』

4. 広島県女の校風

「学苑懐古」四、校風の座談会内容からすると、考えられる校風は「質実剛健」であろう。

当時の教師は校風について次のように記載していた。

「彼の親切、辛抱のモットーにさらに質実剛健の校風は全生徒に滲透しいわゆる県女型を称えられたものでした。」（『皆実有朋六十周年記念誌』）

同様に質実剛健を校風とする元教師、卒業生もいたが、これとは別に有朋8期生は校風について次のように記載していた。

「県女は有名な堅実質素な校風で、服装は木綿の筒袖にえび茶の袴というスタイルでした。…略…校訓の〈親切辛抱〉はもとより（柔よく剛を制す）とか数々の教えをいただき、真剣に拝聴したものでした。」（『皆実有朋九十年史』）

また大正7年、当時3年生が校友会の機関紙『真己とのとく』に校風、校訓について次のように書き綴っていた。

「[国家は只情操によつてのみ保たるべし]と独伊の古王は云つたというが、我校こそ真に情操を以てかくも隆盛をきたしたのである。五百に余る在校生は一に親切辛抱を心の楯として、十年来日本一を誇りつつある健全強壯な体軀を身の楯として、学問に修養に其目的に向うて突進して居るのである。見よこの掃き清められた校庭に水兵服も甲斐甲斐しく、靴音高く踏みならして運動に一心になって居る少女の雄々しい姿を、頑丈な体格を。木綿着の筒袖に袴裾高く、胸をはって速足に道の左側を歩いて行く少女の元気に満ちた顔色を。淑かにして而もはきはきして居る其物云いぶり、動作、下級生の上級生に対する、生徒の先生に対する、厳格にして親しみのあるも、我校の誇りの一つであらねばならぬ。そして我諸先生の有がたき御熱心、我等の尊き努力の結晶は、遂に日本一の体格、優秀なる学力、堅実質素なる校風を織り出したのである。思へば実に我校の前途は広大無辺である。赫々たる希望の光が燃え上がって居るではないか。」(『皆実有朋七十周年記念誌』昭和46年)

広島県女の校風は「質実剛健」と「堅実質素」、当時の教師、生徒により異なって捉えられていたようである。

校風を、内面は同じでも心身の逞しさを重視すれば「質実剛健」と、心身の段階的成長過程を重視すれば「堅実質素」と捉えていたと推測する。

この段階的成長過程を生徒が重視したとすれば、齋藤鹿三郎校長の教育に対する心構えと生徒自身による実践躬行が大いに影響していたと推断する。

校訓「親切・辛抱」の教えと校風の「質実剛健」「堅実質素」は卒業生が戦争という過酷な社会状況下を逞しく生き抜くうえで精神的支えとなっていた。(『皆実有朋六十周年記念誌』、『皆実有朋九十年史』)

齋藤鹿三郎校長の後、歴代の校長も偉大な教育家であったが、紙面の関係でここではふれなかった。

5. まとめ

校風は、学校の教えを生徒集団が取り入れ学校とともにその教えを醸成して成立するものである。広島県女の教育方針は、「至誠」「親切・辛抱」の実践躬行による人格の陶冶、「健全なる女子を教育する」「良妻賢母教育」であった。体育、知育、徳育を強力に推し進め、生徒には実践躬行を奨励していた。齋藤鹿三郎校長は教育に躬行の心得、鉄心石腸を以て地道に取り組み、教育に対する範を生徒に示していた。

広島県女の学力体力は日本一と称していた。

成立した校風は、元教師には質実剛健、当時の生徒には堅実質素、卒業生には質実剛健、堅実質素と人により異なって捉えられていた。

内面は同じであっても心身の逞しさを重視すれば「質実剛健」、心身の地道な段階的成長過程を重視すれば「堅実質素」と校風を理解していたのであろうと考える。

校訓である「親切・辛抱」と校風の「質実剛健」「堅実質素」は卒業生の生涯にわたる精神的支えとなっていた。

6. 参考・引用資料

『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』1978年、『芸備教育7月号 第442号 皇国教育に於ける校風樹立の理念と実践』昭和13年、『日本名家肖像事典第十二巻』平成2年（『明治聖代教育家銘鑑3』明治45年刊の影印復刻）、『皆実有朋百周年記念誌』平成13年、『吉田松陰正史』昭和18年、『新釈漢文大系4 孟子』昭和51年、『吉田松陰の人間学的研究』昭和63年、『風俗画報』第189号明治32年東陽堂 復刻版国書刊行会昭和51年、『開学前史 1877～1948』学習院女子大 https://www.gwc.gakushuin.ac.jp/history/history_01、『学習院百年史第一編』昭和56年、『皆実有朋六十周年記念誌』昭和36年、『皆実有朋九十年史』1991年、『日本髪大全』2016年、『日本の髪型』昭和56年、『女子補習子女教育法』明治39年、『皆実有朋七十周年記念誌』昭和46年、『皆実有朋八十周年記念誌』昭和57年